

## 根を養えば自ずから幹育つ



宮下 亮善

「三つ子の魂百まで」、最近聞かれなくなつた諺ですが、世の中がどんなに変化しようが、文明の利器がどんなに進んでも、人間の本質が変わるものではない。何故なら、人間の肉体と、それを意図する意識の上に成り立っている人間の本質である「性」が存在する限り、根本的に人間は変わらない生き物だということを知るべきです。言い換えるならば、その生殖本能において、なんら動物と変わらないものだと言ふことです。あの吉田松陰先生の松下村塾『士規七則』に、「人間およそ禽獣と異なる所以を知れ」とあります。所謂『騷』

の本質は、この一点にあるわけで、人間を動物にはならないのです。まさに『騷』とは、人としての身だしなみを整えることであつて、身辺を着飾ることではないのです。狼の育てた人間の赤子は狼のしぐさをするたてえであります。

いづぞえ、先生方の教育研究大会に呼ばれて講演をさせていただきました。そのおり、先生方にこのような質問をしました。「先生方は酒を飲みますか、煙草を吸います」かと、ただしましたが、誰も反応がありません。さらに「酒は親が飲めとすすめましたか、煙草は学校の先生がすすめましたか」と、お尋ねしましたが、これにも反応がありません。本質を問われているわけですので、反論ができないわけです。本質的に生身の肉体を持つ人間というのは「楽」をしたい、「美味しい」ものを食べたいという本能をうまれながらに持ち



門前に立つ阿形金剛力士像

合わせているものであれば、それこそ、「悪いこと《欲望》は誰が教えなくとも、覚えるものだ」ということなのです。本能のおもむくままに行動することにおいて、なんら動物と変わらないものなのです。

ある産婦人科の先生より、このような電話がかかりました。「和尚、この子の根性を直してくれ」「どんな子供な」「妊娠八ヶ月だ」「先生、そんな子は預かることはできません。山

奥の寺で、もし産気づいたら責任はもてません」「それでも良いから、是非預かってくれ」「先生がそこまで云われるのであれば、解りました」と、このようなわけで、この子と二ヶ月寝食をともにしましたが、食事は、犬食い、朝夕の挨拶なし、箸の持ち方、茶碗の持ち方、まるで三ツ子に接するような日々でしたが、この子の職業は皆さん何だと思えますか、幼稚園の先生でした。大学を出て立派な資格を取っても、これでは先が思いやられませぬ。しかしながら、妊娠する術は教えられなくとも知っているのです。何故なら、それが本能だからです。

永年、いろいろな子供たちと寝食を共にして来た、その一端を紹介しましたが、何故これ程までに『躰』が軽んじられてきたのでしょうか考えてみました。いろいろな原因が多々あるかと思えますか、私は一つの大き

な原因は食事時の「テレビ」が大きく影響を与えていると考えております。「命」をいただいているのか、「物」を食べているのか、その本質的な意味を学ぶべき食卓が「テレビ」に害されているということです。この自然の摂理のなかで、何らかの他の命を食することに、ここに人間が存在し、いろいろな社会生活が成り立っているのであれば、食（農）は文明の母であるといえます。であればこそ、感謝や知足、恩に報いる心を食卓の場がまさに、人間教育の生きた現場でなければなりません。今日の我が国の諸悪の根源は「テレビ」であると云ったら言い過ぎでしょうか、人間というものは、良しにつけ悪しきにつけ、心にも身体にも「癖」が付くものなのです。生活習慣病とは、心生活習慣病でもあるわけです。そこで、食事の時は『食ON、スイッチOFF』運動を提唱しております。



宿泊研修中の坐禅（南泉院・啐啄精舎）

森信三先生の説かれている『姿勢〈形・型〉を整え、腰骨を立てる』とは、まさに人間を人間たらしめる基本であると解されるわけであり、『挨拶をしっかりと、返事をしっかりと、

履物をしつかり整える』とは、まさに「品格の土台」づくりであり、自制心と他者をおもいやる心《忍耐》、命を粗末にしない感謝と報恩《質素》、人としての身だしなみを整える《礼儀》は、その本質において「不易」ということとあります。

私が、食作法にこだわることの真の意味は、まさに人が人として生きてゆく根源が食卓の場にあるということであり、親子という家族が国家や社会の基盤であれば、そこで培われた品格は国家や社会の品格をもつくるという意味において大変重要なことであるとおもっています。

人が人として「あるべきよう」であれば、国家も社会も「あるべきように」治まるものでしょう。

人間が成長するための『最高の条件』は、『最適な条件』と同じではないという、生物

学的見地から見なければなりません。人間も自然の一員であれば、たゆまざる手入れが大切なのです。水が過ぎれば根が腐り、手を抜けば枯れてしまう道理です。

寺子屋『啐啄塾』塾長  
南泉院住職 宮下亮善



南泉院の不動明王